

知の実践 ジェンダー論を教えるときの留意点

谷 本 千雅子

男女は平等であるべきで、性別による固定的な役割分担は見直すべきである。しかし、現実の社会においては、男女間の賃金格差や昇給問題など、見直すべき問題がいまだに山積し、言説のレベルでも、「女は運転が下手だ」とか「男は料理が苦手だ」など、男女の差を生まれつきのものとして、当然のごとくに見なすような発言が、あらゆる場面に登場する。書店をちょっと覗いて見れば、恋愛指南本コーナーには、男と女の違いを科学的に解き明かしたと称する書物が並んでいる。けれども、男はみんな話を聞かず、女はみんな地図が読めないのだろうか。男は本当に火星からやってきて、女は金星からやってきたのだろうか。なぜ、これほどまで、男は〇〇で、女は××、という表現が世の中には氾濫しているのだろうか。男と女は本質的に違うのだろうか。男と女の差異は、普遍的なものなのだろうか。

ジェンダー論を教える学部の授業で、しばしば出くわすのは、男と女は本質的に違うという学生たちの思い込みである。たしかに男と女は異なっている。染色体、ホルモン、身体的特徴など、生物学上の差異を考えただけでも、その事実は明白である。しかしながら、そうした生物学的な差異の考察に基づいて、たとえば「男は理系、女は文系」といったような言説が、まるで科学的根拠に根ざしているかのように語られ、それが実際の男女の専門分野および職業選択という社会生活のレベルにまで至るとしたら、私たちはその事実をどのように受け止めればよいだろうか。こうした専門分野および職業選択を、生物学に基づいた能力の差異の当然の帰結と考えるか、あるいは偏見に基づいた教育の賜物と考えるかは、実際には真剣な議論を要するのである。社会生物学者であるアン・ファウスト-スターリングは、「男は理系、女は文系」という言説について、遺伝子やホルモンの研究を通じて取り組み、多くの科学者たちがこぞって証明をこころみてきたこの言説が、いかに非科学的なものであるかを論証している。このような批評的立場から見ると、学生たちに、ジェンダーの意味について真剣に議論してもらうことは、非常に意味のあることである。

それでは、男と女は違うと堅く信じている学生たちに、どのようにしてジェンダーの概念を教えていけばよいだろうか。男女の差異を考えると、私たちは、二つのレベルでそれを考えなければならない。ひとつは生物学的な差異であり、それは「セックス」と呼ばれる。もうひとつは、社会的な性差であるとされる「ジェンダー」である。「ジェ

ンダー」という言葉は、従来、フランス語やドイツ語に見られる男性名詞、女性名詞といった、ことばの性区分に対して使われる文法用語である。この「ジェンダー」ということばを、生物学的な性差とは別の次元で認識される性差、つまり社会的な性役割に対して用いることで、フェミニズムは、「女」を閉じ込め規定する性役割から「女」を解放するための議論の拠りどころを得た。「セックス」と「ジェンダー」というふたつの「性差」の間に線引きがなされたことは、フェミニズムのひとつの大きな成果である。その成果によって、近年、ジェンダーという概念は、「男」を「男」の役割から解放するための戦略的基盤にもなっている。

しかし、世の中には、「ジェンダー」は「セックス」を原因としているという言説が、何の疑いをもたれることなく氾濫している。「男は理系、女は文系」という言説も、その一例である。はたして「セックス」は本当に「ジェンダー」の起源なのだろうか。この問題を考えない限り、「ジェンダー」による差別を根本的に解決することは難しいだろう。

「女のくせに」「男のくせに」「もっと女らしくしなさい」「男らしくないわね」。これらのことばが、自分自身に対して、あるいは自分の目の前で他の人に対して発せられるのを、学生たちはこれまで幾度となく耳にしてきたことだろう。時には、こうしたことばに傷ついたり、当惑したり、反発したり、不愉快に思ったり、苦痛に感じたりしたこともあるはずだ。自分自身がこうしたことばを他人に対して発し、相手を傷つけてしまうという経験をした学生もいるかもしれない。これまでそうした体験がなかったとしても、将来、就職したとき、結婚したとき、社会が自分に求める性役割と、自分自身との間に深い溝を感じて悩むことがあるかもしれない。

心の性と体の性が一致しない状態が長年にわたり継続し、それを本人が苦痛と感じ、治療を希望した場合、精神医学では、その人を、「性同一性障害」と診断することがある。心の性と体の性が一致しないことを「障害」と名づけて治療の対象とすることには、もちろん議論の余地があるだろう。実際、教室で、「性同一性障害は病気であるか否か」というディスカッションをグループ単位で行ったところ、病気であるという意見と、病気であるには違いないが、治療を要するものではないという意見とが多かった。同性愛についての講義をした後で行ったディスカッションだったので、もしかしたら多くの学生たちは性同一性障害を安易に同性愛と結び付けてしまい、そのうえで無意識のうちに同性愛嫌悪が働いて、性同一性障害を「異常」な状態であると結論したのではないかと思う。なにが病気になにがそうでないかの判断が、社会の要請によって左右されることはしばしばある。そのことは、精神病の歴史を考えればわかることだ。心の性と体の性が一致しない状態を病理化したのも、それと同様、社会の要請ではないだろうか、と私が投げかけた問いに対し、賛成した学生も少なからずあった。しかし、大半の学生は、

心の性と体の性の不一致に対して、ホルモンの分泌量の異常などの科学的根拠を求め、正常ではないのなら病気であると判断したようである。ホルモンの分泌量について正常な量の範囲をどのように定めるのかという問題も重要だが、もし正常範囲が定められたとして、それにはどのような科学的根拠があるのだろうか。身体的な性別と自分自身が考えるジェンダーの不一致に悩む人々が、「性同一性障害」という病名を得たことによって可視化され、外科的手段を使って体の性から解放される道を得たことは、歓迎すべきことである。しかし、そのような解決策をとるためには、自分のことを「異常」だとみなし、自分の心と体を「病理」化してきた社会から、「異常」で「病気」だと認めてもらわないといけないのである。ジュディス・バトラーが2006年1月にお茶の水女子大学で行った講演会で問題にしたように、この状況は、まさしく矛盾したものであるといわざるをえない。

性同一性障害に見られる心の性と体の性の不一致は、ジェンダーとセックスが実は首尾一貫していないことのあらわれである。ジェンダーは、社会的性差であると認識されていることから、周囲から押し付けられた「男らしさ」や「女らしさ」の規範だと考えられがちであるが、それだけではない。ジェンダーは、人のアイデンティティ（自己同一性）とも密接な繋がりをもっているのである。人の自己認識は、「私」が「私」であることを確認することから始まる。「私」が「私」であることを確認するとき、人は、アイデンティティ（自己同一性）を獲得する。そのときの「私」には、つねにすでに性別（ジェンダーおよびセックス）が与えられている。「私」に与えられる性別は、体の性と一致する場合もあれば、そうでない場合もある。しかし、いずれの場合においても、「私」に性別を与えるのは、周囲の人間に限らず、「私」自身でもあるのだということに留意したい。ジェンダーは、つまり、周囲から押し付けられた規範だけでなく、自己を認識する際に自分自身を規定する「心の性」でもある。

大部分の人たちにとっては、このジェンダー・アイデンティティと体の性別はおおむね一致する。これらの人々を見ている限り、身体的な性別とジェンダーは連続しているかのように思われる。逆に、ジェンダー・アイデンティティと体の性別が一致しなければ、人は、社会生活に居心地の悪さを感じ、場合によっては性同一性障害となり、別の性別で社会生活を送ること（トランスジェンダー）を望んだり、性転換手術を受けて肉体的にも別の性になること（トランスセクシュアル）を望んだりする。このような選択をする人々にとって、身体とジェンダーは、明らかに断絶している。こうした例は近年増えつつあるが、まだ少数派であるため「特殊な例」として取り扱われる。しかし、身体とジェンダーの断絶、つまりジェンダー・アイデンティティと体の性との不一致は、決してそれ自体、病的なことではない。普段、このふたつが比較的一致している多くの人々の場合でも、いつ何時においてもそれらが一致しているとはいえないのである。精神医学の

領域を離れてもっと身近なところに目を向ければ、たとえ性同一性障害でなくても、心の性と体の性が生涯を通して完全に一致し、満足している人が果たして何人いるだろうか。「女」に自己同一化している人でも、自分の中に男性的な部分を見つけることはできるだろうし、その逆もありえるだろう。セックスとジェンダーの関係は、時にその一致が危うくなることもあるのである。そのことを念頭に置けば、セックスとジェンダーの一致という事態こそが幸運な偶然なのであって、さもなければ社会の要請であることに思い至るだろう。ジェンダーという概念を突き詰めるなら、セックスとジェンダーの首尾一貫性ということ自体を、私たちは疑ってかからなければならない。ジェンダーが社会的に意味づけされた性であることを認識するなら、セックスとジェンダーの首尾一貫性も、社会的な規範によってつくられたフィクションであると考えていかざるをえないのである。

ジェンダーが社会的な構築物であることは、「男らしさ」や「女らしさ」という規範が、時代や文化や階級を横断して同一の意味を持つことが決してないということからも明らかである。たとえば、平安時代と江戸時代と平成の「女らしさ」は同じものだろうか。江戸時代の武家の女に求められた「女らしさ」と町人の女に求められた「女らしさ」は同質のものだったろうか。平成の女子高生と、同時代に生きる第三世界の少女に、同じ「女らしさ」が見られるだろうか。ジェンダーに普遍性を求める人々は何とかしてこれらの女性たちに共通の「女らしさ」を見つけようとするだろうが、実際に見つけることは至難の業であろう。社会的な構築物であるジェンダーは、時代、文化、階級を横断して普遍的な意味を持つことはないのである。

学生たちの多くは、このような歴史的事実の紹介を歓迎する傾向にあるようだ。ジェンダーの意味の移り変わりを知ることにより、ジェンダーに本質的なものは何もないということを知り、それにもかかわらず、セックスとジェンダーが連続するというフィクションが、男と女は本質的に違う、という言説と共に、多くの文化に蔓延し、普遍性を持たされているということに思い至る。

1949年、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは『第二の性』のなかで、「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」(第二の性 II, 11)という啓蒙的なことばを記した。生まれた後で人が「女になる」という捉え方には、セックスから区別されたジェンダーという概念の萌芽がすでにみとめられる。しかし、当時は、社会的な性差という意味での「ジェンダー」という概念はまだ存在してはいなかった。「ジェンダー」という概念が実際にフェミニズムに導入されるのは、1970年代のことである。それ以降、ジェンダー概念に基づいたフェミニズム理論は、男性や同性愛者をも視野に入れた現在のジェンダー論へと発展していく。

「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」というボーヴォワールの主張は、ジェ

ンダーは生来のものではなく獲得するものだということを示している。この主張は、セックスとジェンダーは連続しないという認識のもとに成り立っている。つまり、ジェンダー・アイデンティティは家庭や学校における教育によって獲得されるものであり、「女らしさ」は「女」に生まれつき備わったものではないことを、ボーヴォワールは明らかにしたのである。

ところが、そのボーヴォワールにしても、ジェンダーから離れた身体（セックス）に関しては、たちまち本質論へと傾いてしまう。つまり、ボーヴォワールは、ジェンダーがセックスから切り離されるべきだと論じる一方で、男と女の生まれつきの性差を肯定する主張を展開する。ボーヴォワールにとって、女の経験とは、女の身体を経験することであり、それは妊娠と出産に集約されている。

女は、あらゆる哺乳類の雌のうちで、最も徹底的に疎外されていて、しかも、この疎外を最も激しく拒否している雌なのである。生殖機能への生物体の隷属がこれほど絶対的で、それを受け入れるのにこれほどの困難をとまなう雌は他にはいない。思春期と閉経期の危機、月毎の「呪い」、長期にわたり困難も多い妊娠、苦しく、時には危険な出産、病気、故障。これが人間の雌の特徴である。女が個としての自己を主張して自分の運命に抵抗すればするほど、ますます、その運命は重みを増すようだ。(第二の性 I, 57)

もちろん、個々の女の体験が異なっていることを、ボーヴォワールは認めている。しかし、彼女の議論では、個々の女の間での経験の差は、男女の経験の絶対的な差に比べれば、とるにたりないものとして扱われている。この男女の間での絶対的差異という考えは、いったいどこからくるのだろうか。

「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」とボーヴォワールが言うとき、「女になる人」の性別は想定されてはいない。にもかかわらず、それは暗黙のうちに生物学上の「女」であると理解される。「女になる」ことを運命付けられるような性的存在とは何か。それを問いかける視点が、残念ながら、ボーヴォワールには欠けている。それどころか、結局のところ、彼女は「身体」の存在に絡めとられてしまったのである。ボーヴォワールは、「生物学的条件が女にとって固定した運命だとする考え方には同意できない」(第二の性 I, 57) としながらも、女の身体を「一つの状況である」(第二の性 I, 59) として、それを、セックスとジェンダーの関係を論じる際の動かぬ証拠として捉えたのであった。

とはいえ、「主体が自己を認識し、自己を実現するのは単なる身体としてではなく、^{タブー}禁忌や掟に縛られた身体としてである」(第二の性 I, 61) という身体の捉え方や、「むしろ、生物学的条件の方が実存者によって付与される価値をおびるのだ」(第二の性 I,

61～62) という考察は、ポスト構造主義以後の思想家たちの間で、セックスとジェンダーとの関係をさらに深く掘り下げる議論へと発展していく契機となったのであった。

ジェンダー論とは、以上の事柄を踏まえて、男とは何か、女とは何かを考えていく学問である。男女の違いに関して、それをどのように考えるべきかを、検討し、教室で教えるとき、私は以下の三つの点を、心に留めておくように、できるだけ学生たちに伝えるようにしている。

- (1) 男と女に差異があるとすれば、それを私たちはどのように認識し、取り扱えばよいのか。
- (2) 男と女との間の差異は、他のあらゆる差異よりも、絶対的で、普遍的で、本質的なものなのか。
- (3) 男と女の生物学的な差異を、社会はこれまでどのように「解釈」してきたのか。そしてその「解釈」を、私たちの社会的努力によって変えることができるのか。

以上、三つの点は、ジェンダーが言説であるということ、そしてそれが言説であるゆえに、私たちの言説実践によって書き換え可能であるということを確認するために必要な批評的視点を提供してくれるものである。学部の授業では、これらの視点を日常生活の中で身につけるように促し、大学院の授業では、テキストを批評的に読む視点として実践してもらっている。

ジェンダー論は、ともすればイデオロギー教育になってしまう恐れのある学問分野である。しかし、それは、これまでとは劇的に違うものを見方を提供してくれる学問でもある。もちろん、後者の側面が、ジェンダー論の一番の面白さである。それゆえ教室では、イデオロギー教育には決してならないようにできるかぎり注意しながら、できるだけ客観的に、ジェンダー論における様々な理論を紹介し、さらに大学院レベルではテキストに対する批評的な読みの練習を知的実践として学生たちに課している。ジェンダー論が提供してくれる新しいものの捉え方を紹介することにより、フェミニズムやクィアのようなアクティヴィズムにさほど関心のない学生たちにも、ジェンダー論が、十分魅力のある学問であることを知ってもらうことができるのではないかと私は考えている。

Works Cited

- Fausto-Sterling, A. 1985. *Myths of gender: Biological theories about women and men*. New York: Basic Books. (池上千寿子・根岸悦子訳 1990 ジェンダーの神話—[性差の科学]の偏見とトリック 工作舎)
- Beauvoir, S. de. 1949. *Le deuxième sexe*. Paris: Gallimard. (井上たか子・木村信子監訳 1997, 1998 決定版 第二の性 I, II 新潮社)
- Butler, J. Undoing gender. Ochanomizu University. Tokyo. 14 Jan. 2006.